

精神の深さ

——小島優子『ヘーゲル 精神の深さ』

——『精神現象学』における「外化」と「内化」を読む——

寄 川 条 路

目 次

はじめに

第一節 外化と内化

第二節 言葉について

第三節 行動について

第四節 行動と言語

第五節 宗教と言葉

おわりに

文献案内

はじめに

本稿は、小島優子『ヘーゲル 精神の深さ——『精神現象学』における「外化」と「内化」』（知泉書館、二〇一一年）を手がかりにして、ヘーゲルの名著『精神現象学』（一八〇七年）を「外化」と「内化」

という観点から読み解き、これによってヘーゲル哲学のもつ「精神の深さ」を探るものである。

本書の序章「全体の概観」は、ヘーゲルの『精神現象学』を言葉と行動によって意識が外化と内化を繰り返していく運動の過程とみなして、意識の実体への働きかけが同時に実体から意識への作用であることを明らかにする。

ヘーゲルの『精神現象学』のなかで、意識のさまざまな形態は言葉と行動を通じて自らを外化していくが、外化されたものは自己自身へと帰って内化し、自己自身を知る。つまり、意識は自らを実体のうちへと外化しながら、自らが何であるのかを知る主体となるのである。

したがって、『精神現象学』における主体から実体への外化は、同時に実体から主体への内化でもあるといえる。ただし、内化と外化が同一のものであるといっても、内にあるものと外にあるものが並存するのではなく、同一のものが主体にとってよそよそしい場合には外

にあるものとされ、自分自身に関係づけられた場合には内にあるものとされるのである。著者はこのような関係を社会のなかにあるルールとみなして説明していく。

個人は自らの実体である社会のルールに従って行動するが、個人が普遍的な規則に従うのは、自らの行動を知り、自発的に行動するという意味において、主体の自己表現といえる。外からの命令に従うのではなく、人々が暮らしのなかで自ら形成してきたものが社会の習慣なのだから、私たちは自発的に社会のルールに従っていることになる。

これを実体である社会の側から見れば、習慣や規則に従うことは、実体が一人ひとりの人間に自らの主体を自覚させる内化の働きともいえる。そうであれば、著者が語るように、個人が普遍的な規則に従う行動において外化と内化は「表裏一体」をなしている、と言ってもよい。

しかし、著者の見るところ、これまでのヘーゲル研究では外化と内化が関連づけられることはなく、歴史的世界における人間から実体への外化と、宗教的世界における神から人間への内化は、別々に扱われてきた。これによってまた、人間同士の承認と人間と神との承認は一致することがなかった。そこで著者は外化と内化を関連づけ、社会的な側面と宗教的な側面とを総合して新たなヘーゲル像を描き出そうとする。

外化と内化という観点から『精神現象学』を読み解いていく方法はまた、ヘーゲル研究の歴史的な位置づけにも関わってくる。まず第一に、本書はこれまでの研究とどのようにつながり、そして第二に、こ

れからの研究にどのように貢献するのだろうか。外化と内化の総合といっても、それがヘーゲル研究の歴史のなかで独創的な接点となりうるのかどうか問われるだろう。

では、外化と内化、社会的側面と宗教的側面を統合することによって、どのようなヘーゲル像が構築されるのかを見ていこう。

私たちのいる社会のなかでは、各人は自らの意志で行動しているつもりであっても、結局のところは時代や環境の制約のなかにあるから、そこには個人の自由などないかのように見える。とりわけ社会システムが複雑で巨大なものとなった現代では、ヘーゲルの時代よりもさらに個人の社会に対する働きかけが少なくなり、個人が全体に取り込まれているようにさえ見える。

社会の現状をこのように分析する著者は、具体的な一例を挙げて考察を進めていく。

たとえば障害者や女性のような弱者にとって、現代の社会は不公平なものではないだろうか。しかし著者によれば、世の中にはさまざまな意見をもった人がいて、共同体のなかで議論を重ねてきたのだから、弱者の歴史を学び知ると、現実の世界がよりよい世界の実現に向かっているのがわかるという。

そしてここから著者は、時代や社会の特殊な状況のなかにあっても、一人ひとりの人間が自らの状況を引き受け、自らに課せられた役割を果たしていくことが、自由な人間のあるべき姿なのだという。

このように現代社会を分析する著者は、ヘーゲル哲学を外化と内化の両面から捉えながら、自らのヘーゲル研究の独自性を前面に押し出

してくる。

だがその際、著者が注意しているように、ヘーゲルにおいて内化とは自らの内へ行くことであり、それに対して外化とは、言葉や行動をもって自らの外へ出て行くことであった。言葉は個人が自らの考えを外化することで他者との関わりをもたらし、行動は個人の意志を外化することで社会性をもたらず。したがって、他者との関わりもたらず社会性こそがヘーゲル哲学における「精神」だと言ってもよい。

ヘーゲルは『精神現象学』のなかで、「私たちである私と、私である私たち」と特徴づけられるような、個人と集団との関係のなかに共同体の精神を見いだした。しかしそこではまだ、どのようにして「私たち」と「私」が同一のものになるのかという問題は残されたままだった。

著者の考えでは、まずは言葉によるコミュニケーションがそうであるように、個人の意見とあらゆる人々の意見が一致するためには、言葉を介して自らの経験を他人に伝える必要がある。それゆえ、他者に対して自らを言い表す表現、他者とのコミュニケーションの視点に立つて、著者は本書のなかで言葉を考察の中心に据えていく。

そして、言葉が私たちの精神の成立に関わるのは、言い表された言葉が多くの人に聞き取られて内化されるからである。このように言葉は外化と内化の双方に関わることによって、多数の人々の間に共通の地平を開いていく。

それに加えて本書では、複数の人間の相互に異なった言葉の根底に、意見の相違を調停して合意をもたらすための、宗教における言葉の役

割を見いだす。宗教は人間の意識が帰っていく「根底」として位置づけられるのである。

ヘーゲルの『精神現象学』において、意識は自らを外化して実体という「深底」へ進んでいく。だがこれは、実体から意識への働きかけによるのだから、意識にとっては背進であり、意識は精神へと帰って内化していく。意識が行動によって自らを外化し、自己を普遍的なものへと関係づけるのは、社会や習俗や宗教といった普遍的なものからの働きかけによっている。

このように、『精神現象学』における意識の経験は、最終的には宗教の精神をその実体としてもっているというのが、本書における著者の主張である。

第一節 外化と内化

私たちは新しいものを学んだり、すでに知っていることを実際に経験してみたりして知識を深めていく。人間は自らの経験を振り返って後悔したり、満足したりしながら経験を深めていく。他方で、私たちは言葉や行動を通して自分の思想や信条を外に表したりもする。しかし、言葉や行動は他者に受け取られてはじめて共同体の精神となり、文化となり、そして歴史となっていく。これが、本書の第一章において主題となる「外化と内化」である。

外化と内化は一对をなしているのだが、両者を切り離して、ヘーゲル哲学を外化からのみ考察すると、人間と人間との承認（横の承認）

は人間と神との承認（縦の承認）とは別のものになってしまい、承認の保証は得られない。そこで著者は、人間同士の承認と人間と神との承認を統合しようと試みる。この試みは、ヘーゲルの『精神現象学』においては、人間的世界における和解と宗教的世界における和解との調和がいかにして可能であるのかを論証することになる。

人間が社会のなかで行動して自らの意図を実現するのも、神からの人間への働きかけによるものだとして、著者は、社会的な観点から外化を考察するだけではなく、宗教的な観点から内化をも考察する。この考察によれば、『精神現象学』における意識から実体への外化が、同時に、同一の行程において実体から意識への内化でもあることになる。

意識は行動と言葉によって自らの意図を実現し、自らを外化するが、また言葉は他の人々によって聞き取られ、人々の間に共通の理解をもたらすから、精神的なものとなって内化される。これによって、歴史的世界における人間同士の和解と宗教的世界における神と人の和解との総合が完成される、というのが本書における著者の主張である。

したがって、意識の経験においては、歴史的世界と宗教的世界とは切り離されるのではなく、意識が行動し言葉を用いることにおいて、両者は関係づけられる。それは、行動によって意識が個別的な信念から普遍的な義務へと関係づけられるのと同じである。著者はこのことを具体的な例を挙げて説明している。

たとえば「結婚の誓い」がそうであるように、言葉による発言はそれだけでは十分ではなく、同時に一つの行為となって表れてこなければ

ならない。たんに「誓う」と言うだけではなく、誓いの言葉を実践しなければならぬのである。この意味において、言葉はただたんに発話者の内面を外面に移し替えるだけではなく、行動によって現実へと補完される必要がある。

たしかに、行動も言語も個別のものでありながら普遍性を有している。たとえば各人の労働は、社会全体から見れば他の人々が商品を購入してサービスを享受するために役立っており、個別的な行動は同時に普遍的な労働としての意味をもっている。言葉も個人の信条を表現するから個別的なものでありながら、人々の間で共通の理解をもたらすから普遍的なものである。このように言葉には個別性と普遍性の二つの側面がある。

個別性と普遍性を携えて、人間同士が相互的な和解を得て共同体を築き上げるのは、たんに仲間内で理解し合っているからではない。そうではなくて著者が指摘するように、自らの言動が他者からすれば相対的なものにすぎないことを認めることで、かえって他者との和解が成し遂げられるからである。この和解において自己の個別性が同時に普遍性に関わっていることを知り、人間の精神は共同体の精神に関与することができる。

ここに、「私たちである私と、私である私たち」と特徴づけられるような、個人と集団との調和的關係が成立する。

個人と集団との間に良好な關係が成立するのは、言葉によるコミュニケーションがそうであるように、各人が自らの意見を他人に伝えて意見の一致を作り出すからである。だからこそ著者は、他者に対して

自らの立場を言い表す外化の視点に立って、言葉を考察の中心に据えていく。

そして、「私」であるとともに「私たち」である「精神」の境地に言葉が達するのは、言葉が多くの人たちに発言され、聞き取られ、そして共有されることによってである。このように言葉は外化と内化の双方に関わることによって、多数の人々の間に共通の基盤を築いていくのである。

第二節 言葉について

著者によれば、言葉には伝統的に二つの立場があるのだという。

一つは、事物を指し示す「記号」として言葉であり、これはイギリス経験論の立場である。この立場では、言葉は単語に還元され、語や概念を通じて外的事物を指示するものとなる。

もう一つは、言葉を人間の内的な感情を表現する手段とみなすものであり、ルソーの言語起源論の立場である。この立場では、言語は人間が自分の感情や思考を他人に伝えたいという欲求から、伝達する手段として生まれてきたものとなる。

本書の第二章「言葉について」のなかで、著者はこれら二つの言語観を統一しようとする。

まずは、記号としての言語から見ていこう。指示する記号と指示される対象との関係は偶然的で外面的なものにすぎず、記号は、対象を見たり聞いたりすることで頭のなかに生まれてきた像（イメージ）で

あって、まだ言葉になってはいない。

それに対して表現としての言語はどうであろうか。言葉を用いて人が自分の思想や信条を表明した場合、表現されたものとしての言葉が他人によってどのように理解されるのかは、直接的にその人に関わってくる。たとえば、自らの考えを公に表明した場合、その人が高い評価を受けることもあれば、逆に低い評価を受けることもある。

人の考えは言葉によって表現されてはじめて理解されるのだが、自らの思いを言葉で表現したとしても、表現されたものが他人によって正しく理解される場合もあれば、そうでない場合もある。しかし、いずれの場合でも、言い表された言葉は他者によって聞き取られ、外化されたものは再び内化されて人々を結びつける媒語（メディア）となる。

このようなコミュニケーションの手段としての言語は、ヘーゲルの『精神現象学』では、経験を積み重ねていく個人の意識に相当する。

個人がその時代の精神と一体となって普遍的個人となる道程は、これを到達目標である実体の側から振り返って見るならば、精神の自己認識の過程でもある。それゆえ、意識が言葉によって自らの内面を外化し、また自らのうちへと内化する過程は、実体の側からすれば、精神としての普遍的な言葉が言い表されることによって自らを外化し、また聞き取られることによって自らのうちへと内化する過程でもある。

このとき言葉の往復から立ち現れてくるのが精神の内容であり、それは人々の日常的な言葉を通して現れてくる人間の精神であり、共同体のなかで生まれてきた法や道徳である。つまりこれがヘーゲルのい

う「人倫」なのである。このように理解してはじめて人倫的世界の根底にある「精神の深さ」も明らかに becoming してくる。

ところで、本書の主題である「精神の深さ」とは、いったいどのようなものなのだろうか。

ヘーゲルが『精神現象学』のなかで「精神の深さ」に言及しているのとは別に、著者がヘーゲル研究において「精神の深さ」を主題とするには、十分な理由があることなのだろう。ではなぜ著者はヘーゲル哲学にそもそも「深さ」を求めるのだろうか。本書のなかで、形而上学的なアプローチの可能性について触れながら、この点についての説明があってもよかつたのかもしれない。

たしかにヘーゲルの『精神現象学』においては、意識は自らを外化して経験を積み重ねていくが、しかしただ外化するだけではなく、外化した自分を実体のうちに留め置くことによってより深く自分のうちへと内化していく。意識は自らの発言のうちに自らの経験の結果を見いだし、意識の内面を自覚するのである。

意識は自らを外化して実体へともたらずだけではなく、意識は外化した自己を再び内化して取り戻していく。ただしこの過程は、スタートからゴールへ向かい、そしてゴールからスタートへ戻ってくるような空間的な移動ではない。

著者はここでわかりやすい例を挙げて説明している。たとえば、日本を離れて海外へ行くことは、それによってはじめて日本という国の独自性を学び知ることができるように、それまで経験していた世界をより深みのある世界として学び知ることである。このように意識の外

化と内化の運動を通して、本書は「精神の深さ」を明らかにしていく。

第三節 行動について

言葉と同じように行動は個人の内にあるものを外化し、内面にある精神を現実の世界へと移し替える。行動することによって才能や性格は現実のものとなり、作品として形作られる。そして作品は多くの人に受け取られ公共のものとなり、これによって個人の営みは再び内面化される。

人間のあらゆる行いは、たとえ個人として行動しようとしても他者と関わり、他者との共同のなかで成立する。行動した結果、自らの意図が実現されることもあれば、厳しい現実突き当たって裏切られることもある。著者は本書の第三章「行動について」のなかで、ゲーテの『ファウスト』を例に挙げながら、行動の結末をつぎのように説明している。

快樂を求めたファウストとグレートヒェンは、行為の結果、家族や世間の評判、世のしがらみに突き当たり、自分たちがどうすることもできない運命の下にあることを思い知らされる。意図した行為を現実の社会のうちに見いだすことができないうとき、人は社会のなかでよそよそしい必然性に気づくのである。

また、行為の結果がすべてであるとしても、外に現れてきた結果が他人によって異なるように理解されることもある。たとえば、著者がここで例を挙げて説明しているように、スポーツ選手が体調を崩して

実力を発揮できなかった場合、体調管理ができなかったという評価をも含めた全体が、その選手の能力として理解されるのである。

個人は行動することによって自らの才能を現し、自らがどのような人間であるかを明らかにする。そして他者との関わり合いのなかで、他者にどのように理解されているのかを知る。行動とはこの意味において自らの内面を外に表す外化であるといえる。

また、行動を通して人間は自らの限界にぶつかり、他者との対立に出会う。このような経験を通してはじめて、人は自分と世界との関係を再考することにもなる。行動に出なければ人間は自らの限界を知ることもなく、他者との関わりのなかで思い悩むこともない。つまり行動に出るとは、他者関係のうちに身を置くことなのである。

行動の結果を重視するヘーゲルは、「意図の真実とはただ行為そのものである」と述べて、行為の本質を行為の意図にではなく行為の結果に見る。著者は一例として、善い意図からなされた殺人を否定するが、それは、殺人という行為が内面にある意図からではなく、現象として現れた犯罪の考察を通してのみ明らかにされるからである。

内面にある意志が行為によって表現されないのであれば、行為者にとっても他者にとっても明らかになるものは何もない。だが、行為の本質とは行為の結果として現れてきた現実であり、それは内面の意志を表現することもあれば、表現しないこともある。人は行為を自分の思いが現れたものと思いついでいるが、成し遂げられた行為はあらゆる人に開かれているのだから、行為者の意志とは離れたところで他者に理解されるのである。

たとえば、消費活動のように、個人が私的な関心を寄せ、自分のために行動しているつもりでも、実際には社会に関与していたり、反対に、ボランティア活動のように、大きな目的のために行為しようとしても、実際には、個人の利益のためであったりする。私的な欲望を充足させるための個別的な行為も、公的な秩序を築くための普遍的な行為も、行為の結果としては同じことなのである。

著者はここで、ヘーゲルに倣ってアダム・スミスの「神の見えざる手」を持ち出し、個々の人間が利己的に行為することが社会全体の利益につながることを述べている。また、普遍的な行動を個人が成し遂げるのは、個人が全体に関与していることを知りつつ社会に奉仕しているからであり、このように社会秩序に従いつつ人間が個別と普遍を交替させる運動が「精神の運動」なのだという。

精神の運動は、個人が各人のために行為していると思いついていても、他者との関わりを通して社会のために行為していたことを明らかにする。それゆえ、人間は特殊な関心をもって行為すると同時に、その行為が社会によって規定されていることも知っている。精神の運動は、このように個人を社会のうちに関係づけるのである。

自分の利益のために行動することは社会のためになり、普遍的なもののために行為することは自らの利益に合う。個人と社会とは、著者の言葉を借りて言えば、「鏡」のように反映する相互作用の関係にある。行為を個別と普遍の弁証法的関係として捉えたと、現実の社会秩序は個人の営みであるとともに社会全体の運動であることが明らかにする。

ここには、全体と個体との調和が見いだされるだけではなく、行為する人間の考察を通して、個人が個別的な行動をとろうとも、そこには普遍的な精神が現れているのが見えてくるのである。

著者が見るところ、ここでヘーゲルは、時代の状況や周囲の環境から逃れられない個人をしっかりと捉え、社会のなかで流されるだけの個人ではなく、必然的な運命や行為における偶然をも引き受け、また、他者によって自らの行為の結果を批判されようとも、それを自覚的に引き受ける個人を描き出している。

第四節 行動と言語

ヘーゲルは『精神現象学』のなかで、日々の生活や必要に適った社会のルールを「掟」と呼んで、現実の世界で妥当する普遍的な規則を二つに分けて説明している。一つは国家のなかで通用している「人間の掟」であり、もう一つは家族のなかで通用している「神々の掟」である。

いずれの掟も、形式的な「法」とは異なり、多様な人間の生活状況を内面に移し替えたものである。家族や国家という人倫的世界のなかでは、個人は外にあるよそよそしい法に従うのではなく、内面にある掟と一体となって自発的に行動している。

本書の第四章「行動と言語」によれば、人間と掟とが一体になったとき、行動と言葉は一つになり、この関係は必然的な運命となる。

「運命」とは、人間が自ら知りつつ行動し、それに従うものである。

運命は、人間にとってどうすることもできない「宿命」とは違って、自ら知りつつ関与することのできる必然性のことである。人間にとって理解することのできない宿命は、人間が自ら行動を起こして積極的に関わることによって運命へと変容する。行動とはこのように宿命を運命へと変容させる外化の働きである。

人間が積極的に関わる必然的な運命とは、ヘーゲルの唱える人倫的世界のなかでは、男性にとっては国家であり、女性にとっては家族である。掟そのものはすでに社会のなかにおいて、他者に命令されることなく男性は自らの国家に従い、女性は自らの家族に従っている。ここでは、男性が支配する国家と女性が支配する家族とはそれぞれ別の領域をなし、自然な性別に従って男女が生活している。

しかしそうはいっても、男女の領域を分けることで、ヘーゲルは女性を低く評価していたわけではない。むしろ著者によれば、ヘーゲルはギリシア悲劇『アンティゴネ』のように女性を高く評価していたのだという。

アンティゴネは家族の掟に従いつつも、国家の掟に逆らったことを後悔して罪責に駆られる。後悔と罪責によって家族の掟のみならず国家の掟にも従わざるをえないことを知るから、アンティゴネの罪責のうちには、女性もまた国家の一員であるということが明示されている。そしてこのとき、男性は国家に仕え、女性は家庭に仕えるという役割分担が根底から揺るがされる、というのが著者独自の解釈である。

アンティゴネは国家による刑罰を受けるのではなく、男性の女性支配を脱するために、家族の掟に従いつつ自らの意志によって自殺を遂

げたのであり、著者が『アンティゴネ』に見いだすのは、女性は生命を賭けて行動することによって男性による支配を脱することができるというものである。

そうはいっても、ヘーゲルは男性を国家のなかに、女性を家族のなかに置き、伝統的な役割分担を負わせていると非難されるかもしれない。しかし著者の解釈に従えば、この非難は当たってはいない。アンティゴネは罪責を通じて社会に潜む矛盾を一身に感じ、自らの行動を通して社会の真の姿を暴き出すから、むしろ、国家と家族との分裂を自らの行動を通して体現する世界精神の役割を果たしているのだと、著者はアンティゴネを高く評価する。

そこから著者は、自らのアンティゴネ解釈を現代社会における男女の関係に適用していく。それによれば、女性が男性に抑圧されているのは、女性が男性の支配下に安住していられるように、女性自身があるような状況を自ら選び取っているからであり、女性は男性の支配下に安住するのではなく、自立して行動することが必要であるという。

ヘーゲルを持ち出すまでもなく、女性は国家による統治といった普遍的なものへの関心を抱かず、自分の子どもや兄弟といった家族の一員にしか興味を持っていないように見える。しかし、国家は国内では家族を抑圧して統治しているにしても、対外的な戦争においては、家族のもとで女性が生み育てる勇敢な若者によって維持されている。

平和な時代であれば、著者が語るように、男性に依存した女性はその地位を脱するために、男性よりもより多くの努力を必要とするだろうし、女性が自己を確立するためには、強い信念をもって男性社会に

挑まなければならないだろう。だが、ヘーゲルがアンティゴネの行動によって示したのは、たとえば、家庭における消費、子どもの養育、埋葬による血統の継続など、国家の維持のために必要不可欠な要素であった。

そうであれば、家族の個別性を担っていた女性に象徴される個人も、国家の普遍性を担って普遍的な個人となっていく。ヘーゲルの『精神現象学』は、個人を、その時代の精神と一体となった普遍的な個人へと導く道程であり、それは同時に、社会の基底である実体の側から振り返ってみると、社会を担う精神が自己を認識していく過程でもある。

それゆえ個人が行動と言語によって自らの内面を外化する過程は、同時に自らのうちへと戻っていく過程でもある。これはまた、人倫的世界においては、普遍的な精神が言い表されることによって自らを外化し、また聞き取られることによって自らのうちへと内化する過程である。

主体的な意識の側からすれば、精神の現れとは、人間が自らを外化して社会および文化との関わりの中で本来的なあり方を獲得する教養の道程である。経験を積み重ねて自然状態を脱した人間は、自らを外化することによって分裂に陥るが、疎遠なものとなった人間は社会および文化を学び知り、再び内化していく。外化と内化を繰り返すこうした運動が、『精神現象学』において意識がたどる教養の道程である。

教養の道程を通じて人間が行動の内容を他者へと言明するのは、言葉によって言明してはじめて行動の結果が妥当なものとなるからであ

る。したがって、著者が指摘するように、言明することが行動の真実であり、行動の実現であるともいえる。

行動したことは他者に知られ、言明したことが他者によって聞かれる。行動しただけでは行為者の意図は他人には伝わらないから、言葉を用いることによって人は行動をどのような心情からなしたかを説明する。このとき外化された自己は他者によって内化されていき、個別的な自己は普遍的な自己となっていくのである。

第五節 宗教と言葉

ヘーゲルの『精神現象学』において、意識から精神までの言葉は、個別的な意識である個人から発せられるものであった。個人が発した言葉は、他者によって聞き取られ、共同体のうちへと取り込まれていく。

ところが、本書の第五章「宗教と言葉」では、言葉は神によって発せられるものとなる。宗教においては、人間の語る言葉は共同体の側から捉え直されて、そこでは、内面の心情を表出する人間の言葉も、共同体の精神ともいべき神の言葉を借り受けたものとなる。宗教において言葉は、人間が発するものというよりも、むしろ神が発するものとして捉えられるのである。

では、なぜ宗教において言葉は人間の発するものではなく、神の発するものとなるのだろうか。

著者によれば、それは、共同体の実体である神からの働きかけがな

ければ、人間一人ひとりとは別々の意見を表出しているだけであって、意見の交換がなされたとしても、合意が成立するとはかぎらないからである。

人々は言葉によって自らの意見を表出するが、意見の交換を通して合意にいたるためには、その「根拠」として、神という宗教的な基盤を必要としている。神が発する言葉は、人間が発する言葉の根底であり、言葉による人間精神の発露を根拠づけているのだという。

人間の側が言葉を発するだけであれば、個々人の多様な発言があるだけで、普遍的な合意が成立することはない。ところが言葉は、共同体の歴史のなかで形成されてきた精神を持つことによって、普遍性を獲得することができる。この意味において、宗教における言葉の意義は、それ以前の言葉の意義とは異なっており、これまでの言葉の成立過程を根拠づける重要な役割を担っている。

『精神現象学』においては、意識から精神にいたるまでは、主体としての人間にとって世界との関係がどのようなものであるのかが論じられてきた。しかし宗教においては、実体の側、つまり神の側から世界が創造され、そのなかで人間がどのようなかが論じられる。具体的に言えば、宗教における言葉は、神が現実の世の中を言い表した言葉として聞き取られ、そして取り戻される。この過程は、人間の側からすれば、たとえば「洗礼」や「聖餐」を通して、神の言葉を自らのものとして経験する過程である。人間の行動が神の言葉を追体験することによって、行動と言葉との一致が成立するのである。

それに対して、神の側からすれば、神が人間になるという「啓示」

は、神が自分自身から離れ、人間へと外化することであり、自らのあり方を脱して、より大きな普遍の場を開いていくことである。聖書の言葉で言えば、神が自らのあり方を離れることによってイエスが生まれ、イエスのうちに神自身が受肉する。イエスという一人の人間のうちに神が姿を現すことは、神が自己を放棄して人間の側へ降りてくることを意味している。

したがって、ヘーゲルのキリスト論は、イエスのうちに神と人間の双方を見いだす点において、キリスト教の伝統のうちにある、というのが著者の理解である。

啓示が明かすのは、人間の罪を救うためにイエスがこの世に遣わされ、そして十字架に掛けられて苦しんだことである。これによって人間の罪は許されることになるのだが、このことを人間が理解して、人間が神とともにあることを知り、彼岸にいた神を此岸の人間のもとにもたらすことが、啓示の役割である。

神によって語られた言葉は、著者の理解によれば、神の現れであり、神自身である。そして、神が語る言葉を聞き取ることは、外化された言葉が有限性を離れて再び普遍的な神のうちへと帰っていくことである。人間はイエスを通して人間が神のもとにあることを知り、言葉は人間と神とを媒介する精神の役割を果たす。教団のなかでイエスの生涯を思い起こすことは、イエスの出来事を教団のなかに共通の思い出として留めることであり、想起によって一度は死んでしまったイエスが精神として再生することである。

神から発せられた言葉はイエスのうちで人間という有限者になり、

それと同時に、死とよみがえりを経て、教団の精神のうちに内化され、記憶された言葉となる。つまりこれは、イエスの死によって有限なものとしての身体が失われた代わりに、普遍的なものとしての精神を得ることである。

想起によってイエスの生涯は共同体のなかで人々の間に記憶され、ここに記憶を共有する一つの教団が設立される。教団は、父である神、子であるイエスとともに、聖霊としてキリスト教の三位一体説を形成するのである。

さらに、教団が共有する記憶を礼拝によって人々が意識的に思い出すことによって、イエスの生涯はイエス個人の歴史的事実から教団の成員である各人に関わる出来事へと変容していく。人々の間で共有された記憶は、個人的な記憶とは違って、集団的な記憶を共通の歴史的出来事として共有するような共同体を形成する。

人々が教団という一つの共同体を築き上げ、共有された記憶を思い起こすことによって、記号としての言葉の意義は、啓示における精神的なものとしての言葉の意義へと変容していく。

著者によれば、中世のキリスト教では、聖職者が人と神との間を媒介することになっていたが、ここでは神の言葉を信者が自ら理解することも、神の言葉に従って行動することもなかった。

しかし、ルター派のプロテスタント信者であったヘーゲルにとって、プロテスタントの教団のなかでは、聖書の言葉はもはや聖職者を通して理解されるのではなく、人々の信仰的交わりのなかで解釈し共有されるものとなる。

おわりに

ヘーゲルは、中世のキリスト教における記号としての言葉を、近代のプロテスタンティズムにおける精神としての言葉へと変容する。記号としての言葉を神の啓示によって乗り越え、「精神の深み」に達することが、著者によれば、ヘーゲル哲学のもつ哲学的な意義である。

ヘーゲル哲学のもつ「精神の深さ」には、『精神現象学』の宗教において、神の発する言葉となって現れるイエスが、死と同時に教団のうちによりがえることで到達する。意識による外化が精神への内化となり、行動と言葉を介して外化と内化が相互浸透するところに、著者は「精神の深さ」を見いだす。

個々の人間の精神が一致するためには、神の人間化、つまり実体の主体化がなければならない。というのも、人間が言葉を用いて普遍的な記号の体系を作り上げたところで、言葉の捉え方は、個々の人間のなかで、そして歴史の流れのなかで変わっていくからである。共通の基盤としての神が人間のうちに現れることによってはじめて、人間に共通する言葉を使用することができるのである。

絶対的なものである神は語られ、言い表されることによって対象化される。しかし、語られたものは人々によって聞き取られ、記憶に留められ、意識的に思い出される。各人がイエスの生涯を想起することによって、自らもまた神とのつながりのなかにあることを自覚するならば、個人は信仰を共有する共同体において、自己自身を見いだすこ

とができる。想起とはしたがって、各人が記憶を通じて、他の人々と
の共同において自己自身を見いだすことである。

人間は言葉を用いて自らを外化し、世界のあらゆるものを自分のものに変えようとする。言葉の使用を通して意識が現実の世界へと歩み出すのは、逆に言えば、自らの内面に全世界を描こうとする意識が、現実の世界へと引きずり出されるからである。個人が実体へと外化するのには、実体が個人へとそのように働きかけているのである。

意識から精神までは、意識から実体への外化がたどられた。だがそれは、実体から意識への働きかけとしての内化である。宗教では、神によって言葉が下され、実体から意識への外化がなされた。同時にそれは、人々が神の言葉を聞き取り、内化することであった。このように意識と実体の両方から外化と内化の運動が行われているというのが、本書の最終的な結論である。

本書の課題は、言語と行動という観点から、ヘーゲル『精神現象学』を外化と内化の過程として読み解き、人間同士の承認を人間と神との承認によって保証することであった。

この課題を振り返ってみると、本書の結論部にいたって、一つの疑問が残った。つまり、神の言語を人間へと媒介する啓示宗教は、かつては教団を構築することができたとしても、市民社会を経た現代においても、言語による人間相互の承認を根拠づけることができるのだろうか、という疑問である。

グローバル化した世界のなかで、宗教間対話を通じて多文化共生を目指すにしても、教団における神人の想起が人間相互の合意形成を支

える可能性をもつのかどうか、いま一度冷静に考えてみる必要があるように思う。

文献案内

小島優子『ヘーゲル 精神の深さ——『精神現象学』における「外化」と「内化』』（知泉書館、二〇一一年）。

本書は、もともとは異なる雑誌に発表された十本の論文であり、その後まとめられて、二〇〇七年に上智大学に提出された博士論文である。二〇一一年末に単行本として出版されたのち、二〇一二年度の日本ヘーゲル学会研究奨励賞を受賞している。A5判・上製・二八六頁、二〇一一年二月三〇日刊（ISBN 978-4-86285-123-9）。

付記

本稿は、日本ヘーゲル学会第一六回研究大会合評会（東京工業大学、二〇一一年十二月）での報告をもとに、学会誌『ヘーゲル哲学研究』第一九号（二〇一三年十二月）に掲載された評論を補うものである。報告と評論では、小島優子『ヘーゲル 精神の深さ——『精神現象学』における「外化」と「内化』』の第五章「宗教と言葉」と終章の二つの章のみを扱ったが、本稿では、序章から終章までの全七章を扱っている。